

國學院大學図書館蔵『城一本平家物語』の紹介

一 國學院大學図書館蔵『城一本平家物語』の書誌

千明 守

本稿は、國學院大學図書館蔵『城一本平家物語』（以下「城一本」と略称する）について紹介するものである。

まず、書誌的事項について紹介する。

本書の体裁は、縦二十八・一センチ、横十九・八センチ、表紙は丹色、料紙は楮紙を用い、袋綴じである。古活字版で、全十二巻、完本である。表紙見返しに、「八坂板平家物語 共十二冊」と墨書（これは、巻一・三・五・七・九・十一・十二のみ）。外題は、表紙左上に題簽を張り付け、「平家物語 一（〜十二）」と記す。内題・目録題はともに「平家物語巻第一（〜十二）」とあり。尾題は「平家物語巻第一（〜十二）終」と記す。

各巻の本文丁数は、墨付き丁数で、巻一〇六十八、巻二〇八十一、巻三〇七十二、巻四〇六十九、巻五〇五十九、巻六〇五十三、巻七〇六十二、巻八〇五十一、巻九〇八十九、巻十〇六十七、巻十一〇七十一、巻十二〇九十二、である。他に各巻とも本文前後に遊紙各一丁が付く。

巻十二の巻末に、次のような整版の刊記がある。

寛永三年の春の比藤田檢校

城慶加賀国にて筑紫方檢校城一

用ゆ雲井の本と奥書侍る平家

物語を求侍りき此本則其雲井の

本を写畢筑紫方檢校城一本と奥

書侍故に藤田檢校城慶此本を

用て八坂方の平家と号す」

干時寛永五^戌_辰曆

九月上旬

洛陽三条寺町

中村甚兵衛尉開之」

この刊記は、卷一末尾にも、初めの半丁のみ（「平家と号す」まで）存する。

本文は、漢字平仮名交じり、十二行古活字版で、濁点を付す。各冊巻頭に章段目録を置き、本文中にも章段を立てる。本文中に一カ所、元の本文の上に張り紙をし、文字を訂正している所がある（巻四、本文第一丁表「いつくしま御幸」の中の七行目、「さくらまちの中納言重教おと、左京の大ぶなかのり」とある「重教」の部分。下の文字は確認できない）。版心には、「平家巻一（一十二）丁数」とあり。印記は、各冊本文第一丁表右下にあり。印面が不鮮明で読みとりにくいのが、「方南堂蔵」と読むことができる。「方南堂」が誰の蔵書なるかは不明だが、『弘文荘善本目録』（一九七七年）の同書の解説には、「九州佐伯毛利家旧蔵」と記してある（本書は、弘文荘より一九八二年に購入したもので、上記目録に掲載の写真是現國學院大學図書館蔵本と印

記に至るまで同一である)。

本書と同種の『平家物語』は、現在所在のあきらかなものは、東京芸術大学蔵の巻十二の零本のみである。これは、楠見恩三郎氏旧蔵本で、山田孝雄氏が「平家物語考続説」(『國學院雜誌』一九一七年四月)で紹介されたものである。芸大本は、國學院本と同版で、巻十二末尾に前記の刊記を付すが、「干時寛永く甚兵衛尉開之」まで(すなわち刊記の裏面)が欠けている。また、川瀬一馬氏『増補古活字版の研究』(八九六頁)によれば、

昭和戊寅(十二年)四月十三日阪本猷氏の東道で南都手貝町住、百々恭之丞の蔵書を拝見の際、二十数部の古活字版の中に原装の美本(十二冊)を初めて一見した。(中略)卷一と十二の末に寛永三年の跋(整版一葉)を附し、巻十二の末には更に、「干時寛永五戊辰曆九月上旬 洛陽三條寺町中村甚兵衛尉開之」の刊記がある。百々氏蔵本は間もなく小汀利得氏の手に帰し、小汀文庫にはなほ古桑文庫旧蔵の印刷原題簽附、原装本(十二冊)をも蔵する。

とあり、写真三葉を載せるが、この写真が百々氏旧蔵本なのか古桑文庫旧蔵本なのかは不明である。いずれにしても、その写真を見る限りでは、國學院本と同版である。小汀氏蔵本は現所蔵者は不明だが、少なくとも、現國學院蔵本はその写真の本とは異なる。写真(巻一本文第二丁)には、國學院本にある印記が見えず、國學院本にない書き込みが見えるからである。

なお、山下宏明氏『平家物語研究序説』(一九七二年)には、

一方、小汀本には「白桑文庫」の印があり、百々恭之丞氏の旧蔵と言う。(三九八頁)

とあり、これによれば、小汀本は一種ということになる。

二 城一・城慶について

まず、刊記に見える「城一」「城慶」なる人物について考察しておきたい。

「筑紫方検校城一」とは、『当道要集』に、

性仏右平家琵琶を弟子城正検校に伝へ城正亦城一検校に伝ふ此城一は菊地の何某の庶流にて筑紫に住ゆへ筑紫方殿といふ是を在名を呼ぶの始なり城一弟子式人有壺人は城玄壺人は如一といへり

と紹介されている人物で、これによれば琵琶法師の始祖性仏の孫弟子に当たることになる。また、『臥雲日件録』文安五(一四四八)年八月十九日条に、最一検校の語る言葉には、

性仏之後、曰如一検校者、有二弟子、一曰覚一、一曰城一、々々弟子城元、居八坂、

とあり、先の『当道要集』とは師弟関係に若干のずれがあるが、いずれにしても平曲草創期に近い人物ということになる。が、しかしこの「筑紫方検校城一用ゆ雲井の本と奥書侍る平家」というのは、城一本文を見る限りにおいては全くの仮託であろうと思われる。

次に、「藤田検校城慶」という人物であるが、これは実在の確認できる八坂方(大山方)の琵琶法師である。『三代関』(慶長八年以降に新たに検校になった者の、所属流派・登録年月日・師匠・師匠の師匠、を記し、検校の三代に渡る師弟関係を明らかにしたもの)から、関係のあるところだけ抜き出してみる(引用は『増補国語国文学研究資料大成平家物語』一九七七年による)。

大 山 方 坊 藤田城けい

一 石田城だん 祖 中川城りう

同(寛永)一八辛巳年二月廿三日

大 坊 石田城たん

一 徳田城ぎん 祖 藤田城けい

同(万治)四丑年二月十五日

大 坊 徳田城ぎん

一 橋爪城てう 祖 石田城たん

同(元禄九)年六月廿三日

大 須川ニ替ル 坊 徳田城きん

一 宮村城くわん 祖 石田城だん

同(元禄十一年正月元)日

「一 × ×」とあるのがその時検校になった琵琶法師の名前、「坊」が師匠、「祖」が師匠の師匠である。これを系譜としてま
とめてみると、

中川城りう——藤田城けい——石田城だん(一六四一年)——徳田城ぎん(一六六一年)

橋爪城てう(一六九六年)
宮村城くわん(一六九八年)

となる。これでは、藤田城慶自身が検校になった年月日はわからないが、一代ごとの検校になった年代差から考えて、一六〇〇～二〇年頃(慶長・元和頃)に検校になったと推定され、一六二八(寛永五年)年に城一本を上梓したという刊記も事実と考えるとよいだろう。

当時、琵琶法師の流派は、『三代関』によれば、一方四派(師堂派・妙観派・源照派・戸島方)、城方(八坂)二派(妙門派・大山方)の六派があったことが知られるが、その中でも大山派は最も検校の人数の少ない一派であった。とはいうものの、大山方は、中川城りう・藤田城慶と続くこの一系だけでなく、この時代には、鷺坂城かんから春田城にん、千賀城じんへと続く系列や、松賀城こんから安達城じう、高橋城ごんへと続く系列などが健在で、かなりの数の琵琶法師が活躍していたことがわかる。『隔蓑記』等の当時の記録には、大山方の琵琶法師の名が、一方の琵琶法師たちにまじって多く見いだすことができる。また、『慶長見聞集』(三浦浄心著)には、

愚老若き頃坐頭平家をかたる、その中に右兵衛佐頼朝公伊豆の国の目代八牧判官平兼隆を夜討にし義兵をあげし事を諸国の坐頭八牧判官とかたりけるに城言といふ一人の坐頭有てやすぎ判官と語る、此すぎとまきとの両説をややともすれば問答しつるが、一人の坐頭片意志者にてわが師匠城慶坊は生国伊豆の人にてやすぎの事をよく知てをしへしなりとて語やまず、皆人じやうごは坐頭とあた名を付て笑ひたりし

とあり、城慶の名が見える(ちなみに『城一本』では「兼隆」のことは「やすぎ」ではなく「やまき」となっている)。

なお、刊記に見える「洛陽三条寺町中村甚兵衛尉」なる人物については未詳である。

三 研究史について

城一本の最大の特徴は、八坂系に分類されている諸本が巻十一・十二に分散して置いてある建礼門院関係記事(覚一本の灌頂巻に相当する記事)を巻十二の途中に集結し、それを「平家物語くはんぢやう巻」と号している点である。城一本を初めて世に紹介された山田孝雄氏(前述)は、この点に注目され、これを灌頂巻特立の前段階的形態であると結論づけられた。この考え方を受け継いで発展させたのが渥美かをる氏「平家物語灌頂巻成立考」(『愛知県立女子大学紀要』一九五七年一二月)である。

一方、高橋貞一氏『平家物語諸本の研究』(一九四三年)は、百々恭之丞氏蔵本について詳しく紹介され、

一方流、八坂流の中間に位し、一方流本に準據して八坂流本(八坂本に近いもの)を以て増補改訂せられたと認められるものである。

と結論された。

次いで山下宏明氏『平家物語研究序説』(一九七二年)もまた、その本文を精査され、城一本が八坂流第二類本(城方本等)と一方流本との混成の上になるものであることを明らかにされた。

そして池田敬子氏「城一本平家物語の本文形成について」(『室町藝文論攷』一九九一年)は、特に巻十二の義経関係章段の考察から、城一本の混態的性格を明らかにされている。

四 城一本本文の混態性について

城一本の本文は全巻を通じて、すでに高橋氏が報告されているとおり、一方系諸本に近い本文と八坂系諸本に近い本文とを合わせ持ち、両者の混態本文であるといえる。

まず、本文混態の様相を具体的に確認しておこう。引用するのは、巻七「清水のくはんじや」である。城一本の傍線を付した部分は覚一本に、波線を付した部分は城方本(山下氏の分類では八坂流第二類B種)と一致する部分である。

〔城一本〕木曾しんじついしゆなきよしをあらはさんがためにちやくし清水のくはんじやよししげとて生年十一歳になるせうくはんにうんのもちつきすわふぢさわなといふきこゆる兵共をつけて兵衛の佐のもとへつかはす兵衛の佐このうへはまことにいしゆなかりけるそ頼朝いまだせいじんの子をもたずよし／＼さらば子にし申さんとてしみつのくはんしやをあひぐして鎌倉へこそ帰られけれ其後木曾越後の国へうつて出城の四郎と合戦す城の四郎又いくさにまけて出羽のかたへそ落行けるさる程に木曾東山ほくろく両道をしたかへて五万余騎のせいにてすてに都へせめのほらんとす

〔覚一本〕木曾真実意趣なきよしをあらはさんがために、嫡子清水の冠者義重とて、生年十一歳になる小冠者に、海野・望月・諏訪・藤沢などいふ、聞ゆる兵共をつけて、兵衛佐の許へつかはす。兵衛佐「此上はまことに意趣なかりけり。頼朝いまだ成人の子をもたず。よし／＼、さらば子にし申さん」とて、清水冠者を相具して、鎌倉へこそ帰られけれ。*さる程に、木曾、東山・北陸両道をしたかへて、五万余騎の勢にて、既に京へせめのぼるよし聞えしかば、(覚一本は「*」の位置に章段「北国下向」を立てる。)

〔城方本〕木曾かなはしとや思はれけん子息清水の冠者義重とて生年十一歳になられけるに海野望月諏訪藤沢以下の兵五百余騎を差副て兵衛佐のかたへつかはさる兵衛佐此上は意趣なしとて清水の冠者を具足して鎌倉へこそ帰られけれ去程に木曾は越後の国にうつて出城の四郎と合戦す今度も又城の四郎軍に打まけて出羽境へぞ落行ける去程に平家は去年の冬より明

年の馬の

城一本のこの部分の前後の本文は大体覚一本に近い本文であるが、一部分だけ二類本(城方本)に近い本文が挿入されるように入っている。

また、次に引用するのは、巻一「清盛せうじん」の一節である。この部分、城一本の本文は二類本(城方本)に近い。が、末尾に、二類本に欠ける「鱸」の記事を覚一本から補って挿入している。

〈城一本〉清盛其人にはあらね共一天四かいをたなころにきり給ひし上は人とかう申すに及はず平家加様にはんじやうせられけるは熊野ごんげんの御りしやうとぞ聞えし(以下「鱸」の記事へ続く)

〈覚一本〉其人ならではけがすべき官ならねども、一天四海を掌の内ににぎられしうへは、子細に及ばず。平家か様に繁昌せられけるも、熊野権現の御利生とぞきこえし。(以下「鱸」の記事へ続く)

〈城方本〉清盛其人にあらね共かやうに一天四かいを掌に握給ひし上は人とかう申すに及ばず角て仁安三年十一月十二日に清盛病に侵れ五拾一にて出家し法名浄海とぞ名乗られける(以下「禿童」の記事へ続く)

もう一例、掲げておく。巻七「清水のくはんじや」である。

〈城一本〉うんかのごとくはせ参る東山道は近江みのひだの兵ともまいりたれともとうかい道とうたうみよりはがしは参らすほくろく道はわかさより北の兵共は一人もまいらす伊豆の国の住人伊藤の九郎すけうちさかみの国の住人また野の五

郎かげひさ武蔵の国の住人長井のさいとうへつたうさねもりは平家のかたへそ参りける平家まつ木曾のくはんじや義仲をつるはつして其後兵衛の佐をうたんとてほくろくだうへうつ手をつかはさる

〈覚一本〉雲霞のごとくに馳まいる。東山道は近江・美濃・飛驒の兵共はまいりたれ共、東海道は遠江より東はまいらず、西は皆まいりたり。北陸道は若狭より北の兵共一人もまいらず。まづ木曾冠者義仲を追討して、其後兵衛佐を討んとて、北陸道へ討手をつかはす。

〈城方本〉皆参りけり東海道には遠江より東は参らず東山道には近江美濃飛驒の兵参りけり北陸道には若狭より北は参らず
 其外は皆参りけりされ共伊豆国の住人伊藤の九郎祐氏相模国の住人俣野の五郎景久高橋の判官長綱武蔵の三郎左衛門有
 国長井の齊藤別当実盛は平家のかたにぞ候ひけるさらはまづ北国へ発向せよやとて

先に引用した部分の続きの部分であるが、やはりここでも、城一本は覚一本に依拠しながら、覚一本に欠ける記事を二類本から採って挿入している。

このように、城一本の本文はどの巻においても一方系の本文と八坂系の本文とを切り接ぎ、混態させており、とうてい灌頂の巻特立以前の姿を留めるものとはいうことはできない。

五 城一本の依拠本文について

城一本本文が、一方系の本文と八坂系第二類の本文との混態によって成り立っていることは明らかだが、次に、具体的に現存の何本に近いのかについて考察する。この問題についてはすでに山下氏が、

城一本の本文は、室町中期以後の一方流本、例えば下村時房刊本の本文に重なる面が大きい。(『序説』四〇一頁)
 城一本と関係のある八坂流第二類本は、そのB種本、それも現存の本よりもやや古い本と見てよいだろうか。(同四〇三頁)

と報告されている。今回の調査においても大体山下氏の出された結論と同様の結果が得られたが、一方系依拠部分については下村本よりも葉子十行本に近い部分が多いように感じられた。一・二例を掲げておく。

左に引用するのは、巻四「いつくしま御幸」の一節である(覚一本の章段名でいうと「還御」にあたる)。この部分、城一本は一方系本文に近く、八坂系第二類は当該本文を欠いている。

〈城一本〉	神主さいきのかけひろかかいじゆじやうの五位国し藤原のありつなしなあげられて	じゆけの四ほん	ゐん
〈覚一本〉	神主佐伯の景広加階従上	の五位国司藤原在綱しなあげられて加階従下	の四品院
〈葉子本〉	神主佐伯の景広加階従上	五位国司藤原有綱品上げられて加階従下	の四品院
〈下村本〉	神主佐伯の景広加階従上	五位国司藤原有綱しなあげられて加階従下	四品やかて院
〈流布本〉	神主佐伯の景広加階従上	五位国司藤原有綱品被上て	従下の四品並びに院
〈城〉	の殿上ゆるされけり座主そんゑいあじやりになざる神りよもうごき入道相国の心もやわらぎ		ぬらんとそみえし
〈覚〉	の殿上ゆるさる	座主尊永法印	になざる神慮もうごき太政入道の心もはたらきぬらんとぞみえし
〈葉〉	の殿上許さる	座主尊永法眼	になざる神慮もうごき入道相国の心も和らぎぬらんとぞ見えし
〈下〉	の殿上ゆるさる	座主尊永法眼	になざる神慮もうごき入道相国の心もやはらき給ひぬらんとそみえし
〈流〉	の殿上を被赦	座主尊永法眼	になざる神慮も動き入道相国の心も和ぎ給ぬらんとぞ見えし

〈城〉その夜の夜半ばかりよりかせもおさまりなみもおだしかりければ御ふねこき出させ其日は備後の国しきなのとまり
 〈覚〉夜半ばかりより浪もしづかに風もしつまりければ御舟こぎいだし其日は備後国しきな泊
 〈葉〉其の夜の夜半ばかりに風もをさまり波も穏しかりければ御船漕ぎ出ださせ其の日は備後国敷名の泊
 〈下〉夜半ばかり 風 しつまり波もをたしかりければ御船共こき出させ其日は備後国しきな泊
 〈流〉夜半計 風 静て海上も穏かりければ御船漕出させ其の日は備後国しきな泊

もう一ヶ所、巻七「木曾のくはんじよ」の例を掲げておく。

〈城一本〉まつはたさしをさきたて、しらはたをさしあげたらは平家これを見てあわや源氏のせんじんはむかふたるはさだめ
 〈覚一本〉まづ旗さしを先だてて白旗をさしあげたらは平家はを見てあはや源氏の先陣はむかふたるは定
 〈葉子本〉まづ旗さしを先だてて白はたをさしあげたらは平家これを見てあはや源氏の先陣はむかうたるはさだめ
 〈下村本〉先謀に白旗三十流れ先たて、黒坂の上に打立たらは平家はをみてあはや源氏の先陣のむかふたるは
 〈流布本〉先謀に白旗三十流先立て黒坂の上に打立たらは平家はを見てあはや源氏の先陣のむかふたるは

〈城〉て大せいにてそ有らんさうなふひろみへいつるなかたきはあんない者我等はぶあんないなりとり籠られてか
 〈覚〉て大勢にてぞあるらむ左右なう広みへうち出て敵は案内者我等は無案内也とりこめられては叶
 〈葉〉て大勢にてぞあるらん左右なうひろみへうちいでてかたきは案内者われらは無案内なりとりこめられてはか
 〈下〉敵は案内者御方は無案内なり

〈流〉何十萬騎か有らん

被取籠ては叶

〈城〉なふまじ
 〰️
 〈覚〉まじ
 〰️
 〈葉〉なふまじ
 〰️
 〈下〉
 〰️
 〈流〉まじ

ただ、これは巻によって違いがあるようで、全巻をくまなく調査したわけではないが、巻十一・十二など下村本に近い部分もある。

城一本の八坂系近似部分の依拠本文については、山下氏のご指摘の通り、第二類B種(城方本)がもっとも近いと考えられる。確認する意味で、一例掲げておこう。巻二「西光かきられ」の冒頭である。「京都本」とは第二類A種に分類されている京都府立総合資料館本である。

〈城一本〉今度 山門のたいしゆのさきの座主とりと、め奉たる事を法皇きこしめされていと、やすからすおほしめす所に
 〈城方本〉今度 山門の大衆の先 座主取 留 奉たる事を法皇聞 召 れて大きに安 からずとぞ仰せける
 〈京都本〉去 程に山門の大衆の先 座主取 留 奉たる事を法皇聞 召 れて大きに安 からずとぞ仰せける
 〈葉子本〉さる程に山門の大衆の先 座主取り留むる 由 法皇聞 し召 していと安 からず思 し召す所に

また、城一本は、一方系本文(葉子本あるいは下村本に近い本)と八坂系本文(第二類B種に近い本)の他に、読み本系の本文を一部取り込んでいると思われる箇所がある。語句単位での近似関係は多く見ることができ、比較的大きな記事単位で近似す

る箇所をあげると、

- ① 卷一、「禿童」の後に「王莽」の話あり、盛衰記・延慶本・長門本に同じ記事が見える。盛衰記が最も近い。
- ② 卷四、「新院殿島御幸」の後に「供奉の貴族の人名列挙」があり、盛衰記にのみ見えるが、本文は一致しない。
- ③ 卷七、「高橋長綱最期」に「入善と南条と首を争う」の記事あり、長門本・盛衰記に同様の記事が見えるが、盛衰記が最も近い。
- ④ 卷七、「知度最期」の詳しい記事あり、盛衰記のみに見える。
- ⑤ 卷十二、「髑髏御前」の記事あり、盛衰記・延慶本・長門本に同じ記事が見える。盛衰記が最も近い。

一例だけ掲げておこう。卷七「しのはらかつせん」の末尾「高橋長綱最期」の部分である。まず、城一本と葉子本の本文を並べてみる。

城一本 〴〵よいかたきと目をかけむちあふみを合てはせ来りおしならべひつくんで両馬があいへとうとおつにうせんは一八歳
 たかはしはおよすけたる大力なれはにうせんをとつておさへくひをかかんとしけるか高はしこしの刀をおといてなきあひ
 たくひのほねをねちきらふとするとところにうせんがおち南条の次郎家高落合てこしのかたなをぬきたかはしがよろひの
 くさすりをひきあけつつけさまに三刀さいて首を取さてこそ南条にうせんと高はしがくひをはろんじけれ次に武蔵の三
 郎左衛門有国かつさのあく七兵衛かけきよ五百騎はかりておめいてかく

葉子本 〴〵よい敵と目をかけ鞭あふみをあはせて馳来りおしならへてむすつくむ高橋にふせんをつかうて鞍のまへ輪におしつ
 けわ君はなにものそなのれきかうといひければ越中国の住人入善小太郎行重生年一八歳と名のるあなむさん去年をくれし

長綱か子もことしはあらは一八歳そかしわきみねちきてすつへけれ共たすけんとしてゆるしけりわか身も馬よりおりしはらくみかたの勢またんとてやすみゐたり入善われをはたすけたれともあはれかたきやいかにもしてうたはやと思ひ居たる所に高橋うちとけて物語しけ入善すくれたるはやわさのをのこてかたなをぬきとんてかかり高橋かうちかふとを二かたなさすさる程に入善か郎等三騎をくればせに馳来ておちあうたり高橋心はたけくおもへとも運やつきにけん敵はあまたありいたてはおうつそこにてつひにうたれにけり又平家のかたより武蔵の三郎左衛門有国三百騎はかりてをめてかく

城一本のこの前後の本文は一方系本に近い。城一本の傍線部分だけが葉子本の波線部分と異なっている。葉子本(一方系本)が高橋が入善に哀れみを掛け、その隙をついて入善が高橋を斬る、としているのに対し、城一本は、高橋と入善が戦っているところに入善の叔父の南条が駆けつけ高橋の首を取り、その後入善と南条とで勲功を争った、としている。ちなみに、八坂系諸本はこのところを、

〈城方本〉中にも高橋の判官長綱は越中国の住人入善の小太郎とくんで落ける所を入善が従父越後の国の住人南条の次郎落あひて高橋か頸をはとつてけり武蔵の三郎左衛門有国は馬をも射させ

〈中院本〉たかはしのはんくわんなかつなはにうせんの小太郎にくんてうたれにけり今はなかるのさいとうへつたうさねもりむさしの三郎さへもんありくにたた二き返しあはせてたたかひけるか

のように簡略に記すのみである。

この城一本の記事に近い内容の記事を持つのが盛衰記である。

〔盛衰記〕押並べて組んで落つ、始は上に成り下になりころびけれども、流石安家は、二十に足らぬ若武者なり、高橋は老い
 すぐたる大力なりければ、終には入善下に成るをさへて、頸をかゝんとする処に、高橋腰の刀を落したりける、為方な
 くして暫し押へて、躊躇けり、此に入善が伯父に南保次郎家隆と云ふ者あり、此軍に打立ちける時、入善が父宮崎太郎、
 弟の南保に語りけるは、安家は未だ幼弱なる上、今度は初めたる軍なり、相構へて見捨て給ふなと云ひければ、然るべし
 とて出たりけるが、相具せんとて、数万騎が中を尋ねれども見えず、南保首を揚げて、入善小太郎と叫んで、両陣の
 中を通りけるに、小音にて安家敵にくみたり、斯く尋ね給ふは南保殿かよと云ふ、家隆馬より飛下りて、腰刀を抜き、長
 綱が鎧の草摺引上げて、柄も拳もとほれくと二刀刺し、胄のてへんに手を入れて、引き仰けて頸を切る、左の手には頸
 を持ち、右の手にて入善を引上げて、如何に誤りや、軍は後陣を憑み、乗替郎等を相待ちてこそ敵には組む事なるに、
 若者一人立、誤ちし給はんとてさりながら神妙くと云ふ処に、入善隙を伺ひ、南保が持ちたる首を奪取つて逃走り、木曾
 が前に行き向ふ、南保も続いて馳参り、申しけるは、長綱が首をば家隆捕つたりと申す、入善は、我取つたりと論ず、南
 保重ねて申しけるは、入善、高橋に組んで既に危く候ひつるを、家隆落合ひて入善を助けて、高橋が頸をば取つたりと申
 す、入善陳じ申しけるは、安家、高橋に組んで、上に成り下に成り候ひつる程に、高橋が弱き処を、高名がほに南保傍よ
 り取つて候、家隆全く取らず、安家が今日の得分にて候ひつるなりと申しければ、木曾は、入善くむ事なくば南保頸を捕
 るべからず、落合ふ事なくば入善実に遁れ難し、両方共に神妙なりとて、高橋が首をば、南保に付け、入善には別の勲功
 を行はる、

城一本の本文と盛衰記の記事とは完全には一致しない。が、内容は同じである。盛衰記の記事をダイジェストにしたのが城一
 本の記事であるといえるだろう(もちろん、城一本が直接に盛衰記から採集したと断定することはできないが)。

六 城一本の本文作成の方法について

城一本の本文を一方系本・八坂系第二類本の本文と校合しながら見ていくと、その本文混態のあり方が一様でないことに気づく。前に引用した例のように比較的大きな単位(章段・記事・段落単位)で二種類の本文を切り接いでいる部分と、かなり細かい単位(文・語句単位)で切り接いでいる部分とがあるのである。語句単位の混態の例を掲げておく。卷七「さねもりさいこ」の部分である。

〈城一本〉あらはせて御らん候へと 申 ければ木曾殿さもあるらんとてなりあひのいけにてあらはせて見給
 〈葉子本〉あらはせて御らん候へと 申 しければ

〈城方本〉あらはせて御らん候へと涙もせきあへす申たりければ木曾殿誠にもとて加賀の国成相の池にてあらはせて見給

〈城〉へは はくはつにこそなりにけれ

〈葉〉へは 白 髪 にこそ成 にけれ

〈方〉へはけにも白 髪 にこそ成 にけれ

この前後の城一本の本文は一方系に近似するが、波線部の語句だけが八坂系第二類に一致する。もう一例、これも同じ卷七の「惟盛の都落」の一節である。

〈城一本〉やすふ とをらん事 ありかたし 左候へはと とめ

〈葉子本〉やすふ とをらん事もありかたし

〈城方本〉平らかにとをらん事もかたかるへし又あの少なきもの共を引くしてうき目を見せんもいかんそやなれはとて留を

〈城〉き奉るそとよたとひ我 うたれたりと聞給ふともさまなどかへ給ふ事 ゆめゆめあるへからす其 ゆへはいかならん人

〈葉〉 たとひわれうたれたりと聞たまふ共さまなどかへ給ふ事はゆめゆめ有 へからすそのゆへはいかならん人

〈方〉き奉る也(中略)縦惟盛又此世になき者と成たりと聞給ふ共御様などかへ給ふ へからす いかならん人

〈城〉にも見えて身をもたすけをさなき 者 とをも はくくみ給ふへし世のつねのならひなれはなさけをかくる人もなとか

〈葉〉にも見えて身をもたすけをさなきもの 共 を はくくみ給ふへし 情 けをかくる人もなとか

〈方〉にもみえて身をもたすけあのおさなき者ともをもはこくみ給ふへし世のつねのならひなれは情 をかけ奉る人もなとか

〈城〉なかるへき

〈葉〉なかるへき

〈方〉なかるへき

この例でも同様である。城一本は、一方系本に欠ける語句だけを八坂系第二類本から採って挿入している形である。

また、城一本は、異種本文の切り接ぎによって形成された本文だけでなく、かなりの量の独自本文も含み持っている。それらの本文がかなり複雑に入り組む形でその全体がかたち作られている。同じ「混態本文」でも、鎌倉本・小城本・平松家本等とはかなり性格が異なるようである。鎌倉本等は、かなり機械的に異種本文を混合し、そのために生じた多くの本文上の不備を見ることができるが、城一本の場合は、そうした本文上の矛盾点は巧妙に処理されているようである。

このような複雑で手の込んだ本文の作成を、どのような者が何のために起こったのかということについては、まだ結論を出すことはできない。が、少なくとも、このような本文作成の作業が、「机上」で行われたであろうことは間違いあるまい。この本

文が実際に語られたかどうかはわからないが、「語り」によって流動(成長)したといえるような性格のものではないだろう。

城一本平家物語 卷第一 巻頭

平家物語巻第一

祇園寺やうぶや

祇園寺やうぶやの縁のしき縁のじようのひびき
ましやうさうさむれ花の文やうーやひのまひれ
あそかりとあつらひをばぶろ人もあかどな
まれ秋のまれどーなるききと後ちかろひぬ梅ふ
ゆれ前のちりばなぞーとそくぬせうれせんせうと
とつと細小素のちやうかうかんのまうまうやう
のちういなりれ後くもろれはみふさうちひせん
なまうれぬまもさうさうたのしきを極そた下の
まどみんあひももはさうさうあもまのひ入を
思んらんらまうあまもさうあひしめたえう

*使用したテキスト

- 覚一本 日本古典文学大系『平家物語』(岩波書店)
- 葉子本 『平家物語全注釈』(角川書店)
- 下村本 内閣文庫蔵本
- 流布本 『平家物語』(桜楓社)
- 城方本 内閣文庫蔵本
- 中院本 内閣文庫蔵慶長版
- 盛衰記 『源平盛衰記』(芸林社)

(國學院大學文学部兼任講師 千明 守)